

兎の知らない銀竜の話

ちなデ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あるいは、史上最悪に傍迷惑な姉弟喧嘩のお話

目

次

1. 灰色の空の下で
2. 運命の足音
3. 流れ行く雲に
4. 風は導く

35 22 11 1

1. 灰色の空の下で

下ろし立ての制服に手を通す。

白を基準としたソレは、

制服にしては派手過ぎるんじゃないかと思う。

とりあえず誰かの葬式があつたとして、この制服じゃ行けないよなあとか、どうでもいい事を考える。

次は下だ。

俺としては最後の抵抗で、ズボンタイプを所望したが、

あのロクデナシと書いて姉と読むが当然の如く却下。

俺の元には当たり前の様にスカートタイプ。

交渉の余地は無かつた。全身の穴から血を吹き出して絶命すれば良いのに（オブラー

ト）

嫌々ながら本当に渋々とスカートを履く。

そんでもって、部屋の姿見にて最終確認。

腰ぐらいの長さがある癖の強い銀髪は、

そのままだと不格好なため、後ろで一つに括つてある。
邪魔だから切りたいと言えば、くたばれの一言で返される。括つたのは俺なりの抵抗だ。

改造が許されるという学園指定の制服。
個性を出す気が無いので、当然無改造。

そして、膝丈ぐらいのスカート。

…どう見てもただの女生徒にしか見えない。

近くで見てた、諸悪の根源と書いて姉と読むが嗤う。
これから精々頑張りなさいと。

去つて行く背中を、俺は強い憎悪を込めて見つめる。

どうかアイツがロクでもないお亡くなり方をします様にと。

入学前の、1コマだった。

1. 灰色の空の下で

左の席で、一心不乱に仮想キーボードを叩いている水色髪の少女越しに空を見る。教室から見えるソレは、青一つ無い模様。

今朝観た天気予報曰く「雨は降らないらしい」。

成る程見事な一色だ。

こういうのを灰色の空と言うのだろう。

詩的だ。だが無意味だ。

「席に着いてるな。H.R.を始める」

教室に入つて来たのは、茶色ボブっぽい髪の女性。

おそらくこの人が担任だろう。

「日向（ひゅうが）だ。本日からこの1年4組を受け持つ事となつた」

教壇に立ち、威風堂々と名乗る。成る程只者では無い氣を纏つてる。元は代表候補生だったとか？後でググッてみよう。

「私のクラスからは、一人の脱落者も出す気は無い。君達も、そのつもりで着いてきてほしい」

と、先生は教壇を降り

「よろしく頼む」

と、見事な礼をした。

30度。一般的に、敬意を持つて行われる礼だ。

呆気に取られる教室内。

だがその心意氣に胸を擊たれたのか疎らに拍手が起きる。その波は大きくなり、やがて教室全体に巻き起こる。

鳴り響く日向コール。涙してゐる人も散見される。

何だこの状況。

隣の席でひつそりと、仮想キーボードを叩いてた水色眼鏡も、この時ばかりは手を止めていた。

かくいう俺も同じく手を叩く。この先生に着いて行こう。心無しか、空の隙間から青が覗いてる様に見えた。

「ありがとう。では改めて自己紹介をしてもらう」

騒ぎを止め、「あ」から順に…、と言いかけた所で先生が止まる。

何かを思案してゐる顔。伝え忘れが有つたのだろうか。

「ふむ、その前に私から一つ」

態々自己紹介の時間を削つてまで伝える事だ。

何よりあんな生徒思いの先生が言う事だし心して聞くとしよう。

「皆、瑞雲は好きか？」

……は？

――――――――――

「いい加減にして下さい！」

日向先生による【楽しい瑞雲講座】は、唐突に現れた女性のお手本通りの3点バースト射撃により終わりを迎えた。ゴム弾だからセーフらしい。

既に1限目も半分以上過ぎてるし、そもそも自己紹介前に話す内容なのかとも思つてた訳で、隣の水色眼鏡は再びキーボード叩き始めるし、俺はやっぱり空を見てた。

先程青が見えると言つたな、すまん気のせいだつたわ。

「副担任の春田（はるた）です。日向先生が謎の体調不良により倒れてしまつたので、これからは私が引き継ぎます」

体調不良なら仕方ない。あつたかくして寝てほちい。なお現実は冷たい床の上。教室の隅とも言う。

「改めて自己紹介……は、時間がありませんね……では、クラス代表と副代表をこちらから指名させて頂きます」

曰く、近々行われるクラス対抗戦に参加する代表者もあり、生徒会や委員会が開く集まりにも参加する、いわばクラスの顔役。

んで、副代表とはその代表のサボーテーつて事らしい。

まあ、専用機を持つてる訳でも無く国家代表候補生——所謂 I.S.バトルの国際大会での国の代表の候補——でも無い俺が指名される事はまず無いだろう。自己紹介の時間をするつ飛ばしたおかげで一切クラスメイトを把握して無いけど、2—3人くらい名の知れた人ぐらいいると思うし。

誰が選ばれるか、高見の見物させてもらうわ。

「代表は更識簪さんにお願いします」

更識つて誰?と思つたら、隣の水色眼鏡がものすんごい動搖した。クラス中が思わずこちらを見るレベルに。想像してくれ。俺含めた29人×2の目線が一斉にこっち向くんだぜ。普通にコワイ。水色改め更識もそりやビビりますわ。(他人事)

「それで副代表ですが……お隣の高峯此方(たかみねこなた)さんにお願いします」

そんで次に呼ばれた名前に、俺は一瞬遅れて反応してしまう。クラス中の目が一斉に俺の方に向く。他人事と高を括つてたからに、心構えなどしてるはずも無く、情け無くビビつてしまつた。

水色も俺を見る。コイツが高峯か……とか思つてゐんだろうなあ。

「代表に選ばれた二人はお互に協力し、クラスの皆さんには、そんな二人を支える様にして下さいね」

チャイムが鳴り、H.R.が終わる。

春田先生は氣絶もとい体調不良で教室の隅に放置されてた日向先生の首根っこを引つ張つて教室を後にしてた。

春田先生を怒らせてはいけない。

このI.S.学園に来て、最初に学んだ事だつた。

瑞雲は知らん。

※ change

I.S.———正式名称インフィニット・ストラトス。

その速さは既存の戦闘機を置いて行き、力は戦車など相手にならず、それでいて搭乗者は、既存の兵器の何よりも安全というチートスペック。

既存の兵器を過去にした、戦闘用外骨格（パワードスーツでも可）。それが世間一般の常識。

この【世界一安全な兵器】が、元々は宇宙開発用に造られた事を知るのは、機体の作製者とその友人。一部の研究者達だけであろう。これも全て白騎士が悪い。詳しくは

【白騎士事件】でググろう。

さて、チートスペックじみたISだが、唯一の欠点があつた。女性にしか動かせない事だ。

この事がきっかけで、女>>>男の図式が出来上がり、所謂女尊男卑の風潮が高まつていったのだが、それはまた別の話。

重要なのは、女性にしか動かせない。

……はづだつた事だ。

「り…遼来々！」

「泣く子も黙るとはどういう了見だ!!」

今しがた、少しアレな自己紹介をした少年を、黒スーツの女性が出席簿でしばく。彼こそが、世界初の男性操縦者。名を織斑一夏という。

藍越学園に受験する予定だったが、当日道に迷い、彷徨つた挙句IS学園の受験用に用意されていたISを起動させてしまつたのだ。名前が似てるから仕方ないとは本人談。

ともかく、こうして彼は一人目の男性操縦者として、連日お茶の間を賑わすのである。とあるニュース番組では徹底解剖と称して彼の事がある事ない事取り上げられ、深夜

の報道番組ではいつも通り専門家がダニの話をし、ネット掲示板では「二人目発見www」という釣りスレが定期化した。

そんな混乱の中、程なくして二人目の男性操縦者が見つかってと発表される。とある掲示板では、釣りと思われてたスレから本当が出てきてしまい、ちょっとしたお祭り騒ぎになつたとか。

これはすこぶるどうでもいい話である。

「少し良いかな?」

出席簿による物理と衝撃波（担任が有名人という事実に伴うクラスメイトの歎声と悲鳴）による特殊攻撃でHPはほぼ空になり、体力回復のため仕方なく机に突つ伏してた一夏は、突然声をかけられた。

「ああ……確かに高峯だっけ？」

「そうだよ織斑君。一応一人目つて言われてる、高峯彼方（かなた）だ」

銀の髪を首元で切り揃え、赤い縁の眼鏡をかけた、下手すると少女にも見えるその人は、笑みを浮かべながらその手を伸ばす。

女所帯の中で、数少ないどころか二人しか居ない男。同じ境遇同士、仲良くしない理由が無い。少なくとも、彼——織斑一夏はそう思えた。

「ああ、彼方。これからよろしくな」

彼としては、特に何も考えず自然な笑みを浮かべ、伸ばした手を受ける。所謂握手だ。

「つ……うん……よ……よろしくね？」

何故か顔をほんのり紅く染めながら、そう答えた。

この物語は、たまたまISを動かしてしまった二人の異常な少年が、IS学園という全寮制のほぼ女子校で送る、愛と勇気と姉弟の物語——

——に、なるかもしない

2. 運命の足音

突然だが、織斑一夏は良くモテる。

当たり前の様に女性にだが、男性に惚れられる事も、稀によくある。

そして彼はドガ付く程鈍感だ。故に彼を想う女性からのアプローチは気付かない。
彼の友人である、まな板（中国産）からの執拗なアピールも、全スルーしたという経歴を持つ。

兎に角彼は、女性からの好意についてはトコトン気付かない。

しかし悲しかな、男性から自分に向けられる熱っぽい視線には何故か敏感だ。

これは彼が中学時代に、勘違いしたホモ（ゲイ、同性愛者とも言う）に襲われた事による、哀しき防衛本能なのだ。

余談だが、彼はそれ以来自分を襲つてきたホモと同じ体系の全身筋肉質人間を見る
と、震えが止まらなくなるという。

兎に角彼は、ホモには敏感なのだ。

「やあ、さつきは災難だつたね」

先の時間クラス代表を決める話し合いが行われた。クラス中はこれ幸いと、男である一夏が良いと指名。なお、もう一人は副代表に立候補したため、空気を読んで指名されなかつた。

強かである。

その流れにイギリスの代表候補生、古き良き縦ロールが眩しい、セシリア・オルコットが反発すれば、男が代表などという反対意見と調子に乗つて罵倒の嵐。

ブチ切れた彼はすぐさま反抗。そしてなんやかんやあつて、己の意地とプライドとクラス代表を賭けて決闘する事となつたのだ。どうしてこうなつたと、彼は頭を抱えていた。これを自業自得といふ。

「やつちまつた…」

売り言葉に買い言葉とはいえ、仮にも相手は代表候補生。

ISでの決闘の行方など、結果は火を見るより明らかだ。只でさえ、入試時の模擬戦でしか動かした事が無いのに。

「後悔してるの？」

「啖呵切つた事に対してな」

二人目が問えば、一人目が答える。

「じゃあどうするの？今から謝りに行く？」

「冗談じゃない」

——ウジウジしても仕方ない

後悔するのはここまでだ。

自分の頬を思いつきり叩き合いを入れる。

「こうなつたらやつてやる」

——逃げ出すなんて男が廃る

決意一つ。その目には闘う意思。

その姿を見た二人目は、切り替えの早さに呆気に取られつつも

「そう…だね。見返してやらないと」

熱に浮かされた様な表情で、そう言つた。

——外見だけじゃないんだ。

中身まで……カツコイイなんて…

言葉にこそしなかつたが、その想いを一人目は、なんとなく感じてしまい

——コイツ…マジかよ

囁らずも浮上してしまつた二人目の疑惑に、彼は折角の決意が萎んでいくのを感じてしまうのであつた。

2. 運命の足音

お優しい春田先生と瑞雲……違つた、日向先生が退出した休憩時間、4組の面々は大きく2つのグループに分かれる。

1つは、男性操縦者を見に、1組へ特攻しに行くグループ。クラスの7割は既に教室に居ない。なんという事でしよう、10分休憩とは思えない程、教室ががらんどうだ。この調子だと他のクラスもこんな様子だろう。1組前の廊下とか、通勤ラッシュ時の都内電車顔負けの人口密度になつてそう。

男女比率が33:4:じやなかつた99:1のほぼ女子校。その中に居る男という異質。一度生で見たいと思うのは必然。とは、今しがた出てつた名の知らないクラスメイト談。

はたして氣分は動物園のパンダか？

それとも満員のスタジアムでプレーする

スポーツ選手？

：否、サークスのピエロが一番しつくり。

一步間違えなければ、俺もそつちに居ただろう。そう思うと、彼には心底同情する。強く生きる。

さて、もう一つのグループだが、こちらは単純に、席が近いクラスメートで交友を深めてる者達だ。

まあ、急いで見に行く必要も無いだろうとか、元々興味がないとかいう人達だろう。俺もそうだし。

だが、このちらちら見られてる感はどうも慣れない。教室の隅っこに銀と水色が並んでる。俺ら二人、あまり見無い髪色は、教室に残つた人らの興味を引くのには十分だった。

とりあえず、好奇の視線を華麗にスルー。俺も周りを見習つて、となりの水色とよろしくやろう。相変わらずカタカタやつてるけど。

「少し良いかな？」

声をかけると、ビックン！：と面白い程にわかりやすい反応。
そして恐る恐るとこちらを見る。

「……何？」

声が冷たい。キンキンに冷えてやがる。
だが気にせず特攻だ。折れたりしない！

「更識さん……で、良いんだよね？」

「そうだけど……と、彼女は呟く。

いや、H.R.の一件で図らずしも名前を知つたけど、念のための確認だ。ファーストコンタクトで名前を間違えるとか、BAD COMMU一直線だし。

「ワタシ高峯。よろしくね」

俺は警戒心を抱かせない様に、出来るだけ笑みを浮かべながら手を伸ばす。所謂握手の体制だ。

「……更識簪……」

少しポカンとした後、彼女はおずおずと俺の手を取つた。掴みは上々。

「クラス代表戦、頑張つてね。ワタシも副代表として、精一杯サポートするから！」

「……うん……」

話題の一つとして直近のイベントを挙げたが、彼女の返事はなかなかどうして芳しく無い。

深く追求しようと思つたが、まだ良いか。

とりあえず、隣人とお知り合いになれた俺は、その後の会話の中で彼女が日本の代表候補生という事実を知る事になる。

|||||

瑞雲とは——水上偵察機を発展させ、急降下爆撃可能な水偵として開発……つて違つた。

何故かあの担任が、授業中にサブリミナル瑞雲をするせいで、ISより瑞雲に詳しく述べる。奇跡的に専用機とか貰つたら、是非搭載してみよう。

何かに毒された氣もするけど昼休みである。

なんとかメイトだけでお昼を過ごそうとする隣人に対して、焼きそばパンと野菜ジュースをそつと差し入れた後、一人屋上へと足を運んだ。小声でありがとうと言われ、不覚にもキュンときた。俺、卒業したら子犬を買うんだ。

それはそれとして、学園の屋上は常時開放してるとの事。

だが、お昼は学食派が多く、放課後は基本的に部活か寮かアリーナの三択なため、わざわざ屋上に立ち寄る物好きは居ない。日向先生が言つてた。

つまりは、以外と人が立ち寄らない隠れスポットになつていていたりする。一人になりたい時にはもつてこい。

ポツンと置いてあるベンチに腰掛け、購入したコツペパン（税込100円）を頬張る。

：うん、ごく普通のコツペパンだ。具体的には、家族市場とか7—11で売られてるのと大差無いのが。

国の税金ドバドバのI.S学園いえど、ここまで手を付けなかつたらしい。内心ガツカリし、明日から学食にしようと決めた頃、扉の開く音がした。こちらに向かつてくる足音。ベンチは扉を背にする設計なので、姿は見えない。

「見つけた」

背中から声をかけられ、振り向く。

深い茶髪に縁なし眼鏡、特徴的な赤いカチューシャにまな板（日本産）を装備——

「…失礼な事考えて無い？」

「何の事でしようか」

出来る限り澄ました顔で言う。

何故バレたし。相変わらず無駄に鋭い。

「そんな事より！」

そんな事で済まされた。良い判断だ。

個人的にも、ソコは引っ張る所じやないと思う。

さつさと本題に入ろう。次の言葉は、大体予想出来るから。

「何でそんな格好してるの？！趣味なの？！変態なの？」

女 装

「断じて違う!!」

国産まな板——岸原理子の発した言葉を、俺は全力で否定した。

※change

何故か差し入れられた、野菜ジュースと焼きそばパンを頬張りながら思う。
——不思議な人。

私が彼女に抱いた印象は、そんなんだ。

後ろで括った、癖のある銀の長髪を靡かせた、隣の席の彼女
授業合間の休憩毎にもずっと話しかけてくるし、カロリーなんとかでお昼を終わらせ
ようとしたら何か買つてきてくれた。

曰く、そんなんじや足りないとか。

⋮お母さんかな?

兎にも角にも、そんなに気にして世話を焼いてく彼女。当然、意識せざるを得ない。
焼きそばパンを受け取る前に、何故こんなにも構うのか聞いてみた。

「友達だから:かな? それに、副代表でもあるし」

銀髪を靡かせ、見惚れる様な笑顔で、そう言つた。不覚にも少しドキッとしてしまつ
た。

——あの表情はズルイ

気づけば私はキーボードを叩く手を止め、彼女の事ばかり考えていたのであつた。
副代表の仕事に代表の世話が入つてた記憶は無いけど。

：初日からボツチだつた私に構つてくれた。

やむを得ない事情があるとはいえ、初日から周りをガン無視してひたすらキーボード
を叩く人に、誰が話しかけるのだろうか。私もそう思う。
ただでさえ目立つ髪色、そしてあの姉。

更にこの性格と相まって、クラスでも一人で居るだらうなど諦めてた。
だが、副代表にもなつた銀の隣人は、私の思想など関係無く交流を深めてきた。
：私とばかり話すものだから、彼女自身の交友が疎かになつてるのは気付いてるのだ
ろうか。

話してゐる最中にも、チラチラとこつちを伺つてる人も散見されたし。目立つ所だと、
ピンク髪と金髪とか。勿論名前は知らない。

「…友達…か」

その一言だけで、彼女の事が頭から離れなくなる。

——私つて…もしかしてチョロい？

そんなバカなイヤ違うでもだつてそうでもない。

結局、疲れた顔の彼女が帰つて来るまで、私は延々とその事ばかり考えていたのであつた。

3. 流れ行く雲に

灰色の空に手を伸ばす。

その手は流れ行く雲を掴む事は出来なかつた。なお、このポエムに意味は無い。ただの現実逃避だ。

「それで？納得出来る理由があるんでしようね。何も無ければキミはそういう趣味とう事になるけど」

一気に捲し立てる国産まな板（眼鏡付き）。

そう言つた後、ソイツは無駄に良い笑顔で宣言する。

「安心して！ キミがそういう趣味を隠し持つてたとしても、私達の友情は変わらないから……でも少し距離は取らせてもらうかも」

「距離取つた時点で友情に変化が起きてるんだよなあ」

何やら腐れ縁の変わらぬ友情に感涙した、そんな昼下がりである。

3. 流れ行く雲に

俺、高峯彼方には2人の姉が居る。

一人は年の離れた姉で、長女の高峯乃亜。数年前に姿を消したはずだが、知らぬ間にアイドルになつていた。芸名は高峯のあ。

サイケデリック系アイドルとして活動していたが、たまたま出演した公演で圧巻の演技を見せ、それが大受け。

現在は女優業を中心に入活動してゐらしい。

姉弟仲は悪くない。サインも持つてゐる。というか押し付けられた。

もう一人は双子の姉、次女の高峯此方。

俺の天敵で、こんな所にこんな格好で入る事になつた元凶だ。

この姉は事あるごとに俺を敵視する。

テストの点数からスポーツテストの項目まで、ひたすらにマウントを取りまくる。姉

より優秀な弟はいねえとか言いたいんだろうか。

まあ、頭で負けても身体能力では負けないんだけどね。

兎にも角にも、アレは頭脳を持つて、時には権力を持つて徹底的に俺を叩き、俺は徹底抗戦を貫く（成功するとは言つて無い）

いつしか姉弟の間には、埋める事もそもそも埋める気も無い溝が出来上がつた訳だ。

さて、そもそも何故俺がISを動かせるのが分かつたかと言うと、原因は一つ。あの姉だ。勿論天敵の方の。

話は2年くらい前まで遡る。

こんな世の中だから、世の女性達はISを使いこなせるか否かが一種のステータスになつていて。それすなわち、IS学園の卒業証を持つてるかどうかで、その後の人生が変わつてくると言つても大袈裟ではない。

そしてその姉も例外ではない。

姉はISの適性検査で「D -」というゴミみたいな結果を叩き出していた。

ISの適性は、一番上が【S】そしてそこから【A】→【E】となつていて。精密検査なら、更に+ - が付いてくる。

学園に入学する為には、最低でも適性が【C +】は無いと、書類選考時点で落とされる。

おわかり頂けただろうか。

つまり姉は、どんなに頑張つてもIS学園に入学する事が出来ないのである。この事を知った後の晩飯は、人生で一番美味かつた。

その後姉は、父親のコネで I S (ラファア何とか) を借り、適性を上げる為にひたすら訓練を行つた。

訓練の甲斐があつたのかどうかは知らんが、中学3年の春時点で、適性は【C —】まで上がつていた。それでも足りないんですけどね。

そして——

『くつ……何で……何で上がらないのよ!』

今日も今日とて訓練後、姉は簡易検査を受けた。結果は言わずもがな。

父親の使いつ走りで訓練場に用があつた俺は、たまたま姉がそう吐き捨てた現場に出くわした。スッゲエ苛ついてる。

ソイツと目が会う。会つてしまつた。

途端口クデモナイ事を考え付いた様な笑みをしだした。

逃げたいけど逃げられない。

あの目だ。

憎悪を込めて俺を見下す、深い闇の目。

その目で見られると、途端に動けなくなる。理由は分からぬ。ただ、幼い頃からあの目が怖かつたのだ。

ともかく俺は、姉に引き摺られて無理矢理適性検査を受けさせられた。恐らくは、適

性の無い奴が居る中適性のある私凄いを演出したいんだろうか。汚い事に、人は自分より下を見ると無意識に安心するつて、何かの本に書いてた気がする。

男に適性は無い。空が青い地球は丸い並みの、公然とした常識だ。姉はそんな俺を見て笑いたいだけなんだろう。

果たしてそれは上手く行かなかつた。

表示された結果には【A】の文字。

その日、俺は理不尽にも姉の逆鱗に触れたのだ

――

「そんな事があつたんだ」

いつの間にか隣に座つていた理子が言う。

岸原理子。

俺と幼馴染。腐れ縁とも言う。

初対面は幼稚園の時だ。

その時から姉との仲が悪く、最早定期と化した喧嘩をしてる最中に、二人纏めてド

ロツプキツクされたのがキツカケだつたと思う。

何故そんな事をしたのか、数年後本人に聞いても覚えて無いの一点張の模様。ともかくそこから俺達は意気投合し始めた。

姉はその輪の中に入らなかつた。そらそうか。

卒園を気に別れたが、その後世の中が変わるに連れて、俺も姉とは別の学校に転校する事になり、転校先の学校で再会した。小4頃の話である。

「しかしながら：幼小中と続いて高まで同じかよ」

「何年間同じ顔を見続けたと思つてるのよ」

これを【親の顔より見た面】と言います。

最も、小4を最後に本家から離されて暮らしてた俺にとつては、比喩でも何でも無いだろう。

「こういうのを何て表すんだっけ？」

「腐れ縁だろ」

風情も何も無いねと笑われれば、

違ひないと笑う。

流れ行く雲の下。俺達は取るに下らない話に花を咲かせるのであつた。

「それで、女子として入学した感想は？」

「いやーキツイっす」

口調は柔らかく。併まいは女子っぽく。俺口調にがに股なんてもつての他。

この半日それを意識しまくつたせいで、既にグロッキーだ。

アレだ内股意識なんて無理。ワタシ口調つてなんやねん。俺の中の何かが物凄い勢いで削られてる気がする。

「そもそもどうしてそんな格好？」

「あの屑のせい」

全てはアレのせいだ。アレが妙な事を言い出さなければ、俺は今頃スポーツ推薦を貰つた高校に入れただろうに。

「…元々は、替え玉受験用だつたんだよ」

「…えええ」

流石の腐れ縁もドン引きしてる。俺もそんなん思い付いた屑にドン引きだ。

アレの適性は結局【C】止まり。

それではそもそも受験すらさせて貰えない。

そこで考え付いたのが、適性【A】を叩き出してしまった俺を代わりに受験させる事。不本意ながら双子という事もあって、顔立ちはそこそこ似てるらしい。短髪と長髪の違いはあるが、そこら辺を補完すればほぼソックリだと言う。誠に遺憾である。

適性【A】は貴重らしく、ほぼ確実に受かるとの事。そこに漬け込んだ作戦らしい。現にほぼノーエ勉強なのに受かつてしまつた俺。

「それで目出度く合格。俺は解放されるはず……だつたんだけどなあ」

「男性操縦者……織斑君が出てきてしまつたと」

ポテチ片手にニュースを見た時は、驚きはしたけどそれだけだつた。大変だなあとか思つていた様な気もする。要するに他人事だつた訳だ。

俺もISを操縦出来る男の一人だというのに。

その後、本家に呼び出された俺は、開口一番姉に告げられた。

『私、アンタとしてIS学園に入学するから。アンタは私として学園に入学しなさい』
ちよつと何言つてるか分からなかつた。

「ちよつと何言つてるか分からない」

「俺だつて分かんねえよ」

両方女として入学するなら、1億歩ぐらい譲つて分かるかもしれないけど、性別を逆にして入学する意味が全く分からない。

「あつ……でもまさか…ええ…」

理子は何かに気付いた様だ。同じ性別なりに、察する事があるのか。
「何か分かつたのか？」

「いやあ…でも…分からぬから…うん」

途端に歯切れが悪くなる理子。気になるが、分からぬなら仕方ない。
ともかくだ。

「これで、俺がこんな格好で居る理由を分かつてくれたよな」

幼馴染は、物凄い顔をしながら凄まじい速度で、大きく頷いた。
だから何でそんな顔してんだよ。

※ change

昼休み明けの授業。岸原理子は窓際の席に座る彼：もとい彼女【高峯此方】を見てい

た。

彼女の幼馴染【高峯彼方】が言うには、窓際の彼女こそ全ての元凶であると言うのだ。何故、態々男女逆にして入学してゐるのか。聞いた時は全く意味が分からなかつたが、こうして冷静に考えると幾つかの仮説が立てられる。

①自らの I-S 適性を隠すため

この学園の正式資料では、此方の適性が【A】で彼方の適性が【C】になつてゐる。適性検査は毎年やる訳では無く希望制となつてゐるので、よつぽどの事が無い限り適性についてはバレ無い筈だ。適性から替え玉受験疑惑が出るのを恐れて、男女入れ替わりのリスクを負うなど本末転倒な気もする。

だが、可能性としての否定材料も無いので保留。

②ちやほやされたかつた

理子から見てた此方は自尊心が高い人間だつた（とは言つても幼稚園の頃の話だが）その延長で、自尊心を満たすため男装に踏み切つたのでは無いか。
：ほぼ女子校でやる意味。

これが男子校だつたらあり得なくないかもしけないけど、生憎そういう訳では無い。彼女が同性愛者なら話は別だが。

ちやほやされたいだけで男装に踏み切るのは、どうも根拠としては弱過ぎる気がする

ので却下。

③彼方への嫌がらせ

……あれだけ溝が深い姉弟だ、あり得ないとは言えない。

好きの反対は無関心とはよく言うが、あの姉弟は一周回つて憎しみ合つてると言つても良いかもしれない。

もし殺しが合法化されたら、真っ先にお互いを始末しに行くだろう。そんなレベル。あり得そう。

まああれこれ考えて幾つか仮説を立ててみたけど、一番の理由は、アレだよなども思う。

時間は進んで放課後の教室である。

朝から何かしら一夏と行動したがる彼——

理子視点からだと「彼女」になるが。

ともかく彼女は、一夏相手にグイグイ行つてる。近すぎるほど。

「織斑君、高峯君、まだ教室にいたんですね。良かつたです」

この後どうしようか一緒に帰ろうよとか何か話してゐる所に登場した、1組副担任山田先生。

緑っぽい短髪に眼鏡属性つてキヤラ被つてない?とか思つた理子だが、一部分を注視した結果、生意気言つてしまふませんでしたとは本人の談。

童顔眼鏡巨乳の山田先生が言うには、二人に寮の部屋が用意されてる事。それぞれ別部屋になつてしまつた事が明かされる。

えー……一緒の部屋じゃないんですかと此方。安全上のため仕方ないですとは山田先生。荷物ねえよと一夏が言えば、用意してきたぞとは突然乱入してきた担任の弁だ。その後、お手洗いやお風呂に関する話が山田先生と交わされていたが、その間此方は熱に浮かされた様な表情で、一夏を見ていた。

その姿に、野次馬とそれに混ざつてた理子は同じ事を思う。

「これは濃厚な薔薇のかほり」

「完全にアレですね間違いない」

「朗報」二人目は同性愛者疑惑

「たまげてないからセーフ」

寧ろ口に出してた。

不幸な事に、山田先生と話していたはずの一夏にも聴こえており、此方との距離を

そつととつた。だが、気づかない此方。

——1番の理由……これかもね

この調子だと、彼方が彼方を取り戻したとしてもその後苦労するだろうなあと。
謂れのない風評を払拭する幼馴染の姿を想像しつつ、理子は小さく溜息をつくので
あつた。

4. 風は導く

運動部が元気な声を出して校庭を走つてゐる。

空に掛かるは灰色の雲。辺りは薄暗くなり、春先の所為か少し肌寒い。
つまりは放課後である。

授業が終わり、何か言いたげな更識を放置して、やつて来たのは屋上。俺の聖域。
2回目だけど最早俺の特等席と（勝手に）化したベンチに座り一息つく。

昼休みに思いつきり愚痴つたけど、やっぱり氣疲れするのは変わらない。初日からこ
んなんじや、先が思いやられるもんだ。

買つてきた缶コーヒーを口につけ、あまりの苦さに顔を顰める。予想以上に苦い。
雰囲気出すために買ったは良いけど、失敗したなあ。元々俺は紅茶派だ。

どうすつかコレ。

少しだけ飲んだ缶コーヒーの処分に困つていると、何やらギイ…と、ドアを開ける音
が聞こえてくるのであつた。

4. 風は導く

今日までとことんツキが無い。と、屋上へと続く階段を登りながら思う。

高校受験の会場を間違えたまたま置いてあつたISに触れて起動させてしまわ、その結果希望の高校ではなく、IS学園とかいう実質女子校に放り込まれ、自己紹介では張遼…もとい教師をやつていた姉に頭を叩かれる始末。

あの一撃だけで、俺の脳細胞は幾つお亡くなりになつたのだろうか。

そんでもつてやけに距離感が近いもう一人の男子と交流すれば、久しぶりに再会した幼馴染が何故か不機嫌で、縦ロールイギリス貴族に煽られるという。

それで、その煽りの延長戦上で何故か決まつた代表決定戦。俺VSイギリス…オルコットだつけな。ちやつかり副代表に収まつた男子…高峯高峯だつたな。あの野郎。

そして先程の疑惑、まるで野獸の様な眼光を俺に向けるアイツ。俺の精神は限界にきていた。

山田先生の、道草は駄目ですよという忠告をスルーしていくスタイル。

女子と相部屋宣言されてから、とてもじやないけど部屋に戻る気が起きない。せめて男子とだろ嫌駄目だ、アイツは危険だ。

ナニが危険かわからぬけど、なんか危険だ。

結局、部屋にも休まる場所が無いと悟った俺は、癒しを求めて屋上へと来た訳だ。

扉を開けると、まだ冷たい風が肌を付く。

陽が刺さない灰色の空。春先であつても肌寒い。

中学の友人曰く、『困つたら屋上へ行け』との事。空の広さに、悩みなど小さな事だと開き直れるぞ。と、何か悟つた様な表情で言つてたな。付け加えるなら、その瞬間だけ目が死んでいた。

辛い事があつたんだろう友人の体験談を元に來た訳だが、思いの他寒い。こんな寒い日に屋上にいる物好きはいないだろうなあと、辺りを見回すと、銀色が目に入る。

背もたれのあるベンチに座り、校庭を見る銀色。ベンチの構造上、俺に背を向ける形になつてている。

所々癖が目立つ銀色の長髪を一つに纏めた、おそらく女性だろう。

風に流され、そよそよと流れる銀。

何故だかソレが無性に気になつて、気付いたらいつの間にか、銀が俺の手の中にあつた。

「えつ…？」

手の中の銀を撫でる。まるで高級な絹に触れてる様な錯覚。一本一本が繊細な、それでもしつかりとした感覺。残念ながら俺の語弊が足りないせいか、この触り心地をこれ以上表現するのは難しい。ともかく、触れてるとストレスでさきくれ立つた心も、そよ風が吹く大草原の様な、穏やかな気持ちになれる気がする。

もつと触りたい。触れていたい。

そんな俺から逃げる様に、銀はするりと手の中から消えた。

あつ：と、情け無い声を出す俺。手を伸ばしても、銀は掴めない。名残惜しさと共にようやく顔を上げると、困った様な表情をした銀髪の女生徒がこちらを見ていた。先程のは、どうやら彼女の髪らしい。

「いきなり他人の髪を触るのは、良くないと私は思いますよ？」
変わらずに困った表情で、そう言つた。

あれ……俺は一体ナニをしてたんだ？

「う……うめん！」

俺は咄嗟に触れていた髪を離した。

：初対面の女性の髪に勝手に触れる。

普段らしくない行動に、自分自身も戸惑い気味だ。こんなん千冬姉に知られたら唯じや済まないな。

手を離したので、触れた髪が彼女の元へ戻る。彼女が髪を整てる間、俺は自然と土下座の構えをしつつ、彼女の出方を伺っていた。

「いや……そんな事されても……」

癖の強い銀髪は腰ぐらいの長さであり、それを一つに纏めてる。左目にある泣き黒子と髪の長さを除けば、その表情はつい最近見た顔と重なる。

「どうみても通報案件だし……誠意を見せようと」

「…されても困りますから。とりあえず座つてください」

鉄拳制裁の一つも覚悟してたが、かけられたのは意外にも優しい言葉だつた。色々と困惑はあるが、とりあえず彼女に言われた通りに近くのベンチに座る。

「これ、あげます」

手渡されたのは、少しだけ飲んだ形跡のある缶コーヒー。

渡されたのを受け取らないのもどうかと思い、受け取り、含む。：口の中に苦味が広がる。

「やつぱり苦かつたですよね」

どうやら表情に出てたらしい。

俺に缶コーヒーを渡した銀の彼女は、そう言つてクスリと笑い、同じベンチに座つた。
「ああ、すこぶる苦かった」

千冬姉はコーヒーを好んで飲んでたが、俺はもっぱら緑茶派だ。コーヒーを飲めない
わけではないが。

「女子だらけの学校に入学した感想はどうですか？」

「控えめに言つて帰りたい」

貰つたコーヒーに再び口を付けようとした際に、唐突に質問が来た。

彼女はですよねーと苦笑い。どうやらわかりきつた答えの様だ。

「初日でそんな状態でしたら、この先持ちませんよ？ 気持ちは分からぬいでも無いで
すが」

「女子なのに？ 男が多少居ても、ほぼ女子校には変わりないだろ」

「…そうでもないですよ。共学出身のワタシからしてみれば、このレベルの女子校なん
て、また別の世界ですから」

溶け込むのに時間がかかりそうと言う彼女。その顔からは、疲れが見て取れる。
多分、さつきの俺と似た様な感じだろう。それだけで、彼女が同情などでは無く本心で
言つてる事がわかつた。

「女社会も大変なんだな」

「こんな時代ですかね」

くすりと笑い、続ける。

その行為に、不覚にもドキッとした。

「ここはいいですよ。人気が無いから、気分転換にはもつてこいの場所です」確かにいい場所だ。たまには友人の言う事も当たるもんだ。サンキュー弾。

「もし、貴方が疲れたりした時には、この場所を使って良いですよ」

「良いのか？ 君が最初に見つけた場所じゃないのか」

「学校の屋上ですよ。誰のものでも無いです」

いや、そなんだけどさ。何か悪いというか、彼女の場所を（許可有りとはいえ）勝手に奪つた感があつて、あまりよろしくない感情。

「まあいいぢやないですか。ワタシもたまに使わせて貰うつて事で」

あまり広めないで下さいね。と、そう言つた彼女は、ひらりと身を翻し、屋上を後にした。

残つたのは、ベンチに座つたままの俺と缶コーヒー。

「なんていうか…不思議な人だつたな」

話しやすく、嫌な感じはしない。

なんとなく気が楽になつた氣もする。

屋上に行けばまた会えそうだし、その時を楽しみにしつつ、すっかり温くなつたコーヒーを飲み干すのであつた。

…そりいえば、名前聞くの忘れてた

※ change

屋上で唯一の同性と会話したおかげか、いくらか気分が回復した今日この頃。やつぱり女子校つて疲れるね。だからつて男子校ならOKなのかというと、そうでもない。世の中やり過ぎつて良くないと思うの。適量つて大事よね。

つまり、友情と青春が両立出来る共学が最高つてことで。

一人で勝手に結論出し、向かうは我が城、マイルーム。寮にある自室とも言う。

二人目の男性操縦者（笑）となつてゐるアレと違い、こつちは普通に入学した平々凡々の女生徒（爆笑）。そして寮は二人部屋だと。

ここで導き出される答えは単純で、この女生徒（失笑）の部屋には、確実にルームメ

イトが居るという。

普通に考えて、代表候補生でも無く、有名人の身内でも無い俺が、一人部屋など与えられねーわな。一番上の姉がアイドルやつてます！とか言えば何とかなるかな。そんな訳ないな。だからどうしたと返されるのがオチだ。

どうでもいい事を考えながら、気づいたら部屋の前。ドアノブに手をかけると空いてない事がわかる。どうやらルームメイトは不在の様だ。

部屋に入ると、ベッドが入り口側と窓際に置いてある。

窓際のベッドは既にセッティング済みで、先に入つたであろうルームメイトの縄張りと化してた。ベッドの脇に高く積んである、某密林のダンボールがその証拠だ。あの量を捨てるのは苦労しそう。その時は手伝う事にしよう。

そうして、俺は既に届いた荷物を、入り口側ベッドの脇に置く。

さて、同居人が帰つてくる前に着替えを済ませておかないと。いつまでも制服でいるのもどうかと思うし。

ここで唐突だが、俺の履いてる下着について説明しよう。野郎の下着事情なんて知りたく無いと思うがそこは寛大な心で許して。

はい。俺の下着は「安心安全。男の娘ライフの強い味方」のキヤツチフレーズでおな

じみのデュノア社製だ。これは酷い。

元々は軍事企業で、ISにも手を出したらしい。だが、何をトチ狂つたんだが、急に下着ブランドにも手を出し始めたという。

デザインは兎も角、最大の特徴はISの量子変換技術を応用した下着だという。いわゆる、大きすぎる茎（オブラート）や生い茂る草（ビブラート）が下着からはみ出ない様に量子変換して、その周りをスッキリさせてくれる代物なのだ。これで恥ずかしいモツコリともおさらばで皆ニッコリ。

更に調子に乗ったデュノア社は、これまたIS技術を利用した「自然に大きく見える胸」という虚乳に優しいブラを開発。世の貧しい者達から絶大な支持を受けたという。発案者であるデュノア夫妻には感謝しかない。ありがとうございますデュノア社。おかげで、今 の所怪しまれずに学園ライフを遅れてます。もうフランスに足向けて寝られませんわ。どっち方面か知らんが。

閑話休題

ルームメイトが帰つてくる前に素早くシャワーを浴る。湯船に浸かれるのは残念だが仕方ない。汗を流せるだけ良しとする。

しかし風呂か……

パンフレットに乗つてた大浴場を使う訳にも行かないし、どつかのタイミングで本土の銭湯を使いたいなど。

そんな事を考えながら着替えてた時だつた。

不意に部屋の扉が開かれる。

「あれ？」

特徴的な水色の髪を揺らしながら入つてきた彼女は、不思議そうな声で問うてきた。

「…貴方がルームメイト？」

「あ…うん。 そうだけど」

少しだけ難しそうな表情をした彼女だったが、まあいいかみたいな感じで、何か納得したみたいだ。

「改めてになるけど…よろしくね。 更識さん」

「うん……よろしく」